いじめは子どもたちだけでなく、社会全体の問題！

Face to Face 対談シリーズ (No.20)

岸田文雄　角田信朗

昨年は、文部科学副大臣として日韓サッカー・ワールドカップ開催に尽力した岸田文雄衆院議員。つい先ごろ、K-1ファイターとして現役生活にピリオドを打ったが、相変わらずの格闘技界の人気者・角田信朗さん。

そんなお二人に、今回は「いじめを考える」をテーマに語っていただいた。

岸田議員には中学生を筆頭に三人の、角田さんには小学生二人のお子さんがいる。共に子育て真っ最中。どんなお話が聞けるのだろうか。

僕は子どもに、親としてのジャブを打ち続ける

空手と出合って、僕の人生は変わった（角田）

岸田　せんだって、引退試合をなさったばかりですね。長い間ご苦労さまでした。

角田　ありがとうございます。遅過ぎる引退試合なんて言われましたが、ほっとしております（笑）。

岸田　今回、テーマが「いじめ」ということですが、K-1ファイターとして鳴らした角田さんが、小さいころは、いじめに遭われていたとお聞きしてびっくりしております。

角田　いじめていたんじゃないのかなんてよく言われるんですが（笑）、引っ込み思案で、内弁慶で、外では自分を主張できない子どもでした。まずは名前、「かくだのぶあき」と読むのに、「すみだのぶろう」とか、「つのだのぶお」と呼ばれ、自分の名前にすごくコンプレックスを感じていました。

岸田　名前の読み方は難しかったかもしれませんね。

角田　それに、父親の仕事の都合で、小学校だけで四回も転校しているんです。やっと友達ができても、転校先ではまた「すみだのぶお」とか呼ばれてしまう。みんなは面白がっているのでしょうが、当時の僕は疎外されているという思いで、被害者意識しかなくウジウジしていると、活発な子から見るとイライラするわけです。今は、自分の弟子がウジウジしていようものなら、しっかりせいとパンとはたいたりしますが（笑）。

岸田　そんな角田少年がいつごろから変わったのですか。

角田　転校した大阪で、ひどいいじめに遭いました。いわゆる番長に目を付けられて、休み時間や、家に遊びに来たふりをして、袋小路に連れて行かれて殴られ、蹴られる。帰ってきて、玄関でおいおい泣いていると、父親から「おい、のぶ、悔しかったら強くなることや」と言われ、男は強くなきゃあかんねんやということにやっと目覚めました。忘れもしない、小学校四年生の二学期のときでした。それからですね、空手をやって強くなろうと思ったのは。

岸田　登校拒否などは？

角田　学校は一度も休んだことなかったですね。母親が僕を医者にしたくて、通知表は四年生までオール五だったんですが、大阪に来た途端、いじめに遭ったことと、教科書の進度が早いことなどで、それまで自信があった勉強についていけなくなってしまったんです。

岸田　いじめというのは誰にも起こり得ることだし、逆に加害者になることだってあります。私自身には、いじめたり、いじめられたりの印象的な思い出は残っていませんが、どちらの立場にせよ、きわどいところにいたんだろうなとは思いますね。私には三人の息子がいますが、これから大きくなるに当たって、そういう可能性と背中合わせにいるのかと思うと、やっぱり切実なものとして、今、角田さんのお話をお聞きしました。

あるべき人間のぶつかり合いを体験させる（岸田）

岸田　いじめかそうでないかというのは、受け止め方によって違ってもきます。同じことをやられても、笑って済ませられる子もいれば、ものすごく深刻に受け止めて、時には自殺まで考えてしまう子もいます。

角田　あるテレビ番組の企画で、大阪の小学校時代の番長と、三十年ぶりに対面したんです。桑木君というのですが、会ってみると、当時のごんたくれがそのままごんたくれになったようなやつでした（笑）。彼から「お前がK-1の角田になったとは思わへんかったわ、サインしてくれるか」と言われたときは、三十年越しのリベンジがやっと達成できたなと思います（笑）。

岸田　それはそう快だったでしょう。

角田　彼が言うには、「おれは当時、おまえのことをいじめている感覚はなかった。ウジウジしているから、おい！というボールを投げたんや」と。彼なりのコミュニケーションだったんだと。あの時、「おい、つのだ」と言われた僕が、「いや、すみだや！」などと切り返していたら、「なんや、面白いやっちゃな」と、彼と友達になっていたかも分からへん。それを、向こうは「打っても響かんやっちゃな」とちょっかいをかけ、こっちはそれを、いじめられているように受け止めていたんです。

岸田　子どもの受け止め方もあるでしょうが、周りの先生や、大人たちの対応や目配りも大切になってきます。

角田　おっしゃる通りです。道徳の時間に担任の先生が黒板に、「なぜ、角田君を仲間外れにするのか」とかぎカッコで書いて議論したんですよ。今になって思えばそれが、僕にとって一番の仲間外れだったんですね。

岸田　それはちょっと上手な対応ではないですね。

角田　力のあるやつは他人を支配したり、押さえつけようとする。これは、子どもの社会でも、大人の社会でも同じで、この関係は永遠になくならないと思います。

岸田　いじめを含めて、広い意味で人間のぶつかり合いというのはなくならないし、変わらない。これからも子どもたちはぶつかり合いの中で、いろんなことを学んでいくという基本は変わらないと思うんです。私も文部科学副大臣をやらせていただいて、いじめについていろんな関係者の話をお聞きするんですが、そのぶつかり合い方が、家庭の在り方とか、受験のストレスとか、社会の風潮とかによって、非常に陰湿になってきていますね。そして、悲惨な事件にエスカレートしてしまうことも少なくありません。

角田　僕らの空手は、いわゆる寸止めではなく、直接体に当てるんですね。そのためにすごくバイオレンスだって受け止められるんですが（笑）、実は直接当てることが非常に大切なんです。直接コンタクトすることで、痛みを知るということを子どもに教えます。人を殴る、人に殴られるということは、こんなにも痛いんだって。必要以上に相手にダメージを与えたときは、殴ったり、蹴ったりした自分の手も、足も痛いんだって。そういういろんな痛みを覚えようというのが、僕らの空手の原点なんです。

岸田　なるほど、痛みを通して、相手の気持ちを知るということですね。そういった意味では、今は大人も、子どもも、日本人全体が人間付き合いがどんどん下手になっていると思います。

角田　はい、どんどん逆行していますね。

岸田　ある事例として、例えば人前でやる、一対一でやるといったように、ルールを決めて小学生にけんかをやらせたという話を聞いたことがあります。すると、「おれはあいつとけんかをしたい」と手を挙げる子がいたので、組み合わせを作ってどんどんけんかをさせていったら、結果として、けんかやいじめが減ってきたそうなんです。小学校の低学年あたりには、ルールに基づいたけんかを通して、あるべき人間のぶつかり合いを体験させることも必要なのかもしれませんね。

角田　先生のおっしゃるルールを決めてする公開のけんか、それがまさに空手なんですね。何をやってもええで、でもな、急所はあかんで、倒れた相手を蹴るな、それはひきょうやで。これ、小学校でやってもいいと思います。今の子どもたちは、ここまではやっていい、だけど、ここから先はやってはあかんということを学ぶ機会がないんですね。

意見するばかりでなく、大人としての反省も必要（岸田）

角田　島田紳助さんと子育ての話をしたことがあります。紳助さんは子どもと衝突したり、何か問題が起こったときは、「すまん、おれ、親やるの初めてやね。だから今、どないしていいか分からへん。でもな、おれにも子どもやった時代があるから、お前の気持ちは分かるのや。さあ、こっからスタートしよか」と言いはるそうなんです。

岸田　ややもすると大人は子どもに対して、意見ばかりをしがちなんですが、子どもたちが何でそういうことをするのか、言うのかと、自分たちも反省していかないと問題はなかなか解決しないでしょうね。子どもは大人を見ながら育っているんですからね。

角田　親という立場は、言われたことをやれといったように、一方通行で子どもにものを言いがちなんですね。あるいは、子どもの目線に下りるということを、子どもの言うことを聞いてあげる、居心地のいい環境を提供することと勘違いしています。親という立場に両足をどっぷりつけていたら、親というごう慢な立場でしか子どもにメッセージを送れないんです。

岸田　私は、東京と広島を半々くらいで生活しており、ただでさえ子どもたちと接触する機会が限られているので、そういった親としての公平なレフェリー役を果たせているのかなという危機感は絶えず感じています。

角田　ただ子どもの味方になるというのではなく、子どもは今どういう心境で言っているのかに耳を傾けることが大切なんですね。

岸田　いじめというのは、決して子どもたちだけの問題じゃないんですね。大人や社会全体が問われている問題だと思います。

角田　おっしゃる通りです。よく、最近の子どもは変わったとか言われますが、僕は、子どもというのは真っ白な生命体だと思っています。どんなカラーに染めていくかは大人次第なんです。そのために、常に子どもにジャブを打ってあげる。格闘技の試合でも、いきなり自分の技を打っていったって、カウンター食らうのが関の山なんです。まずジャブを打って、こいつ、どう反応するかなと見る。これが大事なんです。

岸田　大人が心を込めてジャブを放つと、子どももジャブを打ち返してくるということですね。おっしゃるように、ジャブによりお互いのコミュニケーションが始まるということはよく分かります。私も週末に広島に帰って、子どもたちにジャブを打つように話をしていると、あれ、こんなこと考えているのかって、子どもの意外な一面に気が付くことがしばしばあります。そんなとき、子どもというのは日々成長しているんだな、発展しているんだなとしみじみ感じます。角田さん、今日は楽しいお話をありがとうございました。

角田　こちらこそ、ありがとうございました。

岸田文雄さん（きしだふみお）衆議院議員

昭和32年、広島県生まれ。早稲田大学法学部卒業後、日本長期信用銀行に入社。62年、父・岸田文武衆院議員の秘書となる。平成5年、第40回総選挙にて衆院議員に初当選。以後、党青年局長、商工部会長、経理局長、青少年問題に関する特別委員会理事、建設政務次官、文部科学副大臣などを歴任。現在、衆議院・議院運営委員会理事、文部科学委員会委員、党科学技術専任部会長の任にある。証券市場育成等議員連盟事務局長、保険制度改善推進議員連盟事務局長、小規模企業税制確立議員連盟事務局長、日本・ベトナム友好議員連盟事務局長、なども務める。広島1区、当選3回。

角田信朗さん（かくだのぶあき）正道会館最高師範　武道家

昭和36年、大阪府生まれ。子どものころ、いじめられっ子だった角田少年は、父親の「悔しかったら強くなれ！」の一言に発奮。マンガ「空手バカ一代」を通して、空手に出合う。関西外国語大学卒業後は、大手商社からの内定を蹴って、「熊を倒すような空手家になりたい」と格闘道一筋を歩むことを決意。その後、K-1ファイターとして活躍、多くのファンを得るが、今年、現役引退、「世界一のレフェリーを目指す」。趣味・特技は、英会話（英語教員免許取得）、ゴジラグッズ集め、エアガン、料理、ものまね、プラモデル作りと多彩。著書に、「角田信朗のボディ・トレーニング」「角田信朗のフルコンタクト英会話」などがある。